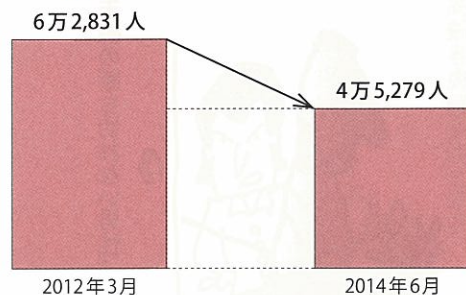


図 福島県から県外への避難者数の推移



2012年3月をピークに少しずつ減少傾向に。
出典：復興庁「震災による避難者の避難場所別人数調査」

<日程>
毎月第4金曜日開催
AM10:00～12:00

4月25日
5月30日
6月27日
7月25日
8月22日
9月26日
10月24日
11月28日
12月26日
1月23日
2月27日
3月27日

<主催：お問い合わせ先>
福島県ふくしま子ども支援センター
024-573-0150
info-ccscd@beans-fukushima.or.jp
<協力>
福島県子育て支援センター連絡会
福島市健康福祉課

ままカフェ@ふくしま

福島市保健福祉センター (アクセス)
福島市保健福祉センター (アクセス)
福島市保健福祉センター (アクセス)

福島県内4か所（福島市、郡山市、いわき市、白河市）で月1回開催されている「ままカフェ」（無料）は、避難先から戻ってきたママのための居場所。子どもたち向けの楽しく遊べるスペースもある。悩みを深いところまで掘り下げて話ができるよう、希望者によるグループワークを経て、託児とNPプログラム付きの「まま話会」の用意もしている

「ままカフェ」&「はみんぐBird」の問い合わせ先：
ふくしま子ども支援センター（NPO法人ビーンズふくしま）

TEL：024(573)0150
ホームページ：http://ccscd.beans-fukushima.or.jp/

復興日記

17

シリーズ

被災地からのレポート

本当の言葉で語り合いながら子どもたちの未来と新しい世界を福島からつくりあげていけたら最高です



「はみんぐBird」が毎月第3木曜日、2時間託児つきで開催している「てととと会」（会費：1回につき300円程度）。安心して正直な気持ちを分かち合える時間と空間で、英気を養う。ほか不定期で勉強会やワークショップも開催
https://www.facebook.com/teamhummingbird?ref=profile

子どもの成長をパパが見られないってどうなんだろう

東日本大震災と原発事故から3年半。長引く避難生活の疲れ、経済的負担、除染の進展、子どもたちの入・進学などを背景に、県外避難者数は少しずつ減少しています。昨年、福島県に戻ったあるお母さんは「2011年3月、0歳と2歳だった子どもと一緒に関西に自主避難しました。避難先では、父親と離れ離れで暮らして、家族としてどうなんだろう、子どもの成長をパパが見られないってどうなんだろう……と自問自答の繰り返し。『一緒に過ごすことも必要だよ』と、上の子の入園を機に戻りました」と語っています。

ギャップを受け止めてくれる仲間がいる「ままカフェ」

避難先から戻った久しぶりのわが家でホッとしたものの、多くのお母さんが直面するのが、現実と心で思うこととのギャップです。「私もそうでした」と話す佐久間香里さん（郡山市在住、「はみんぐBird」代表）。不安を受け止めてくれたのが「ままカフェ」でした。避難先から戻ってきたお母さんたちのサロンでは、「窓は開けていいの？」「洗濯物は？」「食べ物？」など、生活の基本になる部分を本音で語り合うことができました。「目の前がパァッと開けていく感じでした。不安な思いや暮らしの情報をシェアしながら、仲間を力に変わっていく私を見て、夫もよき理解者になってくれました」

本当の言葉で語り合ったママたちが立ちあげた「はみんぐBird」

2013年秋、ままカフェの次のステップとして開催されたノーバディズ・パーフェクト・プログラム「まま話会」に参加した佐久間さんは、同じ時間を共有した友人3人と、すべての人が垣根を外して自由な心で過ごせる空間「はみんぐBird」を立ちあげました。「自分の内面まで掘り下げて話せた会を解散するのはもったいないと思いました」。佐久間さんたちの活動のひとつ「てととと会」は、避難経験の有無にかかわらず安心して話したり、聴いたりできる場所です。不定期で勉強会も開催しています。

「ままカフェ」と「はみんぐBird」を通して自分を育ててきた4人のお母さんは、「福島の子育てで今いちばん必要なのは、子育て支援という立場にいる方もママたちも、みんな同じ福島で暮らしていく『人』という視点。自身の本当の思いに耳を傾けながら、本当の言葉で語り合うことだと思います」と話してくれました。そこから子どもたちの未来や、震災から変わりゆく新しい世界を、福島からつくりあげていけたら、こんなにすてきなことはありません。

※ノーバディズ・パーフェクト (Nobody's Perfect)・プログラムは、カナダ発祥の「親」学習プログラムで、完璧な親はいないという考えに基づく。